



高判

たのむに

白羽

全

單流

湖

東

單

流

中村俊定文庫
文庫 18
308





寫人延神乃心
 門人各領二馬
 仙在東付名
 雙耳深刺
 信印
 今拂子已

句越刺彫尔あつ
 へく只まきくのあつ
 傳んよのあつ乃
 一

十南齋

十南齋
 白羽印譜

中村俊定文庫

十南齋白羽印譜

拂子 八十點

杜若之印

鼎玉 百

以下不與

天賦 百卅

於此卷中

來章 百五十

因不贅

此餘兩印以賞之

以上

白羽評二百歌仙高判按粹

通る面

美の如北新集七回一和四の系

山の響きく今出た月

高儀刺よ定ちの歌廣のそく

を人ささつて借り撥る

廻る極致乃流如新 硯箱

おえ北陣子の明教一きり

拂子之部

蝶も肉の森ぬちちかきおは南紀

浪を春新瑞く老新 藤札同

一枝歟 〱 明乃 笈士同

挽く松く 守山 山 鶴同

そくと標打歌ささるる草系同

春の張問ハハ後乃 出る為記同

湧出子雲をえおら法喜のち同

安達ハ系北 椽り 志同

情をぬき海 船さすてん登同

ゆゑと 椽上 是は陸の戸同

楮林

杜南

麟久

栗流

桃巴

孝風

琴水

梨笏

椽角

湫浦

船一を自勝と名づる母南紀 申仙
 四十九乃非の松をくろきや日 幸速
 穉子実をくろきや御所の細海日 鷺風
 他り樹は手よりまゝ一善の雲日 雨柙
 川のむより骨折つて大日 以中
 尾寺や明系との子一干尋日 竹鳥
 吾子事は吹不き一た村尾を 麟之
 魚り水流き次月乃新松 柙林
 戸のゆくを掃を掃る長阪を 栗流
 かりあきるといふ去一あまの 柙角
 山畑あきとく楠より落草 梨冠

風

振くきくを忘ぬくもま 桃巴
 男山嶽をくろきく登り一船 湫浦
 都一を穉子を掃るたり一あき 桃巴
 草の阪をくろきく一掃りくろ 湫浦
 世の中やあきると花の傍を 桃巴
 乃より低きとめよこ河 湫浦
 人あきると花を掃るたり一あき 柙林
 板木のくろきく何地へ田舎を 穉風
 吹はきくあまのむ乃掃り道 雨柙
 まゝの陣くろきくとはま 以中
 朱川仕とくろきくとはま 穉風

結号 采よきくは神一 意
素券方 海んくん出く梅
怒り と 限は人 梅を愛
釣臺の上よきいー 兼と相
駿河路や下りまの志よ下
康の藤より 事如 勝本の美
扱まき後と 滅くー 信海
仕掛く 家子 憎む 明六つ
おれ 園おき 室て 忍く 医者
敵と 呼まきー 君おれ あり
深院の 燈は 花より 船子 一門 庵
甫仙

第 持つ 多ハ 常交 村尾 花
秋 如 死んて 汗と 是へー 藤衣
院乃 白洲 へ 素券 園 船
佛 講る 烟の中 有り 然り 家
岩れ せく け 事 終 路 へ 志く 家
民 魁の 才子 子より 先へ 入 康
家 同を 我 答ぬ 家
櫓 揚子 ぞ 後い 清ー 意 出 家
玉入の 又 十二 次 ち 振と ぬー
輪の 振舞ー 本 戸が 六 文
羽 千 江を 泥より 上乃 あり 燈
柳 柳
茶 風
柳 柳
茶 雷
抱 嶺 鏡
井 壁 亭
雲 霧 鏡
幸 連
柳 風
南 記
柳 柳
茶 雷
抱 嶺 鏡
井 壁 亭
雲 霧 鏡
幸 連
柳 風
甫 仙

茶園の垣と結ハる鳩乃杖 周末
 勇力又忘せしく嘯ひし神尉 茶風
 沈みおろしぬ互におろしり 周末
 摺遠し何々叫く橋の上 播磨小野 今節
 赤霧の夜り蒼々たる夜 日 北溪
 智者も迷りん古歸りの文 日 鳥水
 せりしちいほも梅りぬ昔清ぬ 今節
 感懐ハ節われ花よ折れ塵 北溪
 る藤と忍る世の啼く藤と脚 鳥水
 雲ねよ成ゆまかくく雲と組 周末
 姪ふ人 経をかうハ坊 茶風

櫛一等の中又神ハ隠きさ 周末
 新口の 孫りもぐれ難し 播磨小野 宇叶
 晒賣声もむさハ峰 作子 日 下谷斎
 お弁産れ相も羨りよと契 日 寄節
 せりしちいほも梅りぬ昔清ぬ 日 小野
 さあくよおろしぬ互におろしり 日 其夕
 狎胃も修心の折れ茶も折 日 燕石
 初まきくも清くま夫婦ハ指を折 日 自喃
 旭出おろしり月も出ろぬ 日 下谷斎
 賢くまり心も賣りの聲 今節
 嘯る加持も養お法印 北溪

考も穢き口より云々され
 鳥水
 さつくと御く柿の指藉
 下巻斎
 煮茶の必きうと御とく
 宇叶
 青月斗りおむ山科
 寄席
 出世ハ孝なり叶ハ法標貝
 小野
 頃日ともと合乃組
 燕石
 秋の小鳥の善毛ぬく
 自噴
 隙のたき隙もつら舞り付
 下巻斎
 之井と下つと意歌なり
 周未
 此年の芭蕉川事る隙の料
 茶凡
 法橋寺たりお足とく點宅る
 周未

漬り穢き口より御森の伽
 近喬
 株穂を仕よ来いと呼付
 周未
 白い子と出るとはりの遠きま
 今節
 穀ハ虫懐麻しぬくめ
 北溪
 麻乃お織れ綿む和風
 宇叶
 稲妻かきお教の標中
 下巻斎
 標多れ群を赤心む市底
 寄席
 文ある法きくさゆり近里
 小野
 汐干底よりと糸
 其夕
 蟹拵く己ら智を同し料理人
 燕石
 壁穿て床の柱より生駒山
 自噴

傳と遊しノ莫も吉ハ抄ノ子
 質モ益モ以テ干と足さる店卸
 船むくノ唐チの山花船ノ人
 連洋の後も懸る也尺幕
 出入さる門ハきさんノ名對面
 夕暮ノ帳も一隅初張ノ
 夢ひるノ〜〜世ノ合心智意
 二人轉んて足さる山
 免さきノ後ハ揚枝を舞之塚
 本ノしの誘ハぬ女乃ク牡丹日
 飲酒戒存乃後つて破るき神々麻田
 下谷荷
 寄席
 小野
 其夕
 蒸石
 自嘯
 迂喬
 宝竿荷
 柿廊
 泉流
 子石

新綿ハ何〜〜小野曲
 赤カハき〜〜ハ記
 植書ハ遊〜〜を好〜〜
 多高橋ヤ〜〜ハ何〜〜
 兼の白心の清ハ離き家
 池ハ岸ノ〜〜年の新ノ烟
 志長ノ別〜〜ハさ〜〜
 雖初の境〜〜ハ兼結きれ
 寺上〜〜人の胤ハ〜〜た
 和睦を守て出〜〜中日吸
 どのり〜〜ハ後等一
 泉流
 柿廊
 子石
 泉流
 子石
 宝竿荷
 迂喬
 柿廊
 泉流
 子石
 伊丹
 舞巾

嬬姫のこころ 十月の天 伊丹 祇定
 浮遊守てあり死し方常江持 日 桃風
 盃へゆとひ竹方 比丘氏唱 日 紫石
 まのり合点お入細人の顔 日 江野亭
 翁よふ雨を揃りまぐり 日 豊阜
 仕るる歌一の建仁寺 桓 素桐
 暮れよまを ぬま 撰出 日 蘭吉
 子の付く高字を親の苗字おと 釜調
 長田水中しり石を割 日 桐鳥
 舟舳ふる 日 楚頭
 湖の氣を汲上る 塩津橋 宝室春

山も藤のふとぬま 日 辻喬
 おもた 日 九年目 日 子石
 蕨のま 日 け 日 蟻卵
 東よ江中 日 け 日 江野亭
 神宮とも 日 け 日 桃風
 本馬 日 け 日 祇定
 八景 日 け 日 森中
 善より 日 け 日 紫石
 浩氣の氣を 日 け 日 豊阜
 ぞ 日 け 日 如風
 原 日 け 日 文房

牡丹を呈了 老乃 粧を
 橙ハ九年母よりも困りけり
 呵黄れこく石くく小屋
 所多る店ぬき町の山くく
 砂糖をりけく喰く梅出を
 能部の男をくくハ支離者
 版焚 見え二日 咲き
 堂とばくく片くくハ豫敷
 膳 碎き 漸く と 穀
 富 多 少 多 多 多 多 多
 掃除は也 軒 窓 の 多 押 垂 以
 素相 巨羊 桐鳥 楚頭 素相 巨羊 桐鳥 楚頭

町中不格様 多 堀下 たり
 凡の多 ねと 軒も かく 見え
 百姓 抱へ 家 一丁 の 庭
 般着 口 又 中 債 所 以 秋
 面 外 一 時 多 呵 ち せ ね り 多 日
 鳴く ち して 証も 目 出 度 揚 子 多 日
 半 恨 び たり 一 甲 斐 の 蔭 柳 日
 弦 あり ち ち ち ち ち ち ち ち 日
 意 多 ち 多 ち 多 ち 多 ち 多
 云 出 一 ち ち ち ち ち ち ち 日
 南 翁 ち 棒 舞 亦 乃 川
 素相 巨羊 桐鳥 楚頭 素相 巨羊 桐鳥 楚頭

幸々々人々々々親々々
 暁乃乃流々花乃抱え帯
 呂子底子秋の柳此月よ濡
 舞々々々流々々々々々々々
 口ワウウ首途あ連々々々
 酔酔々々々々々々々々々々
 本士と於於を本士の魂
 見才ハ他人のこく々々々々
 喧嘩仕りりりり式四の鞠
 披摩路々雨於於々々々々
 毒回りりりりりりりりり

加秀
 九夏
 寸松
 房所
 椋雪
 笛三
 釜調
 菊古
 笛之
 椋雪
 曉雀

舞々々々少れ流む船の孤
 ぬゆゆ々花とと々々々々々
 ぬれ々々々々々々々々々々
 雀とぬれもぬき々々々々々
 音々々々々々々々々々々々々
 画々々々々々々々々々々々々
 利酒酒利酒とととととと
 英々々々々々々々々々々々々
 改を改々々々々々々々々々
 神在はははははははははは
 朝の月拂へく流々々々々々

釜調
 茶雷
 笛之
 曉雀
 椋雪
 笛之
 芦洲
 一章
 種乙
 芦目
 芦洲

知つて居る健もくすく〜
 ありも枝折を石なり落す
 自序を底板改まると意あり物月
 心酒を打店なり九文もふれを吹
 一字を重ぬ〜とて酒の明か
 かり〜ありたい〜実の形
 〆ぬ〜とて同へともふれ系
 制れのふと斜一の井一風
 事ありれ纏り画ぶる康
 孫、詰り終るも辞一あり
 萩を吹萩の下ふかつと後と
 江野亭

南ぶ帆抱より〜ぬ帆抱
 善なると倉の意なり棧音
 加例あり〜検授れある店卸
 かま〜とも喰ぬ傍あり〜強下
 賣り善あり〜と〜酒
 骸より〜石の冷〜き〜角力
 活世の兜鬘女り〜と〜
 象の〜〜傍の若者て川を握
 二番目舞へ〜と〜の声
 流於る家と秋と〜
 月入る〜と〜腕押ハ際
 相鳥
 相鳥
 楚碩
 相鳥
 素相
 相鳥
 洞秀
 素相
 相鳥
 楚碩
 相鳥

後投もみく笑——橋 如風
 清合ぬ七り出い会の陣常急俣 前邑
 不忌用もみくさの形子種と知 周禾
 宇都の山道ハ木と扱う時 左橋
 振くふく名く外猪笹急 周禾
 十ぬく利すのへる花の香 釜淵
 井と切きり 糸くく人ん 左橋
 扱りみ石平——藤新淵 九夏
 画よ套出た文科の雷北香 寸松
 鶯鶴うまき雷——林垣 鷹師
 傳授うかすい負の急子加 加秀

誇りけいむの浪ぬれ飛人形 九夏
 飛子の整りまの濡るるら表 漲谷
 勢してもかき海うみの秋まの事然野 子周
 内てあさへく時外 似城 前邑
 立枯の杉子急——神の表 子周
 一飛やぬく 杉虫を胸よ 茶風
 夕々咲茨の花れ若くろ—— 子周
 室澤ハ總を舟まき終んぬり 周禾
 点漏の空満まを急の力叫 子周
 新々振く剛をおする二口碎 周禾
 浪人の間ハ急のれを陸 茶風

百凡を扇き出さん市家古

柿師

登森の太り嘯ひのた立

泉流

秋風をく巾紙をる旅

雲山

州も埋るる路へ控ふ

泉流

まの太味り 嘗乃啼

紫山

^{題集} 嬌く北石よこがけ 素門

蘭古

^日 握りきれく僧の吟法螺

釜調

^日 梅れおあむれ子乃砥身き

蒲文

流霧のまゝ 田をくはる

嵐什

大工所ももまら生とけり

楓風

香屋のそあもわかおしはまを急

嵐什

小智と 里へ出ま之往

又房

中流のわくぬか流地のゆき

蟻卵

皆を此縁直ぬきいそく粟

如風

不器いそくんさく仰神の告

蟻卵

禪もけは少念ふ考藤ぬ

嵐什

いとそくこと 雲僧乃燈

雲山

かと押へ絲ハぬる糸案天

蟻卵

灯をよる絲を呼ぶ花の希

雲山

おそくきよんことおる葦の路

迂喬

昨の不持ぬきりまを控ふ

桐鳥

秋堂をいさく井乃座 迂喬
 浄土の翁者古寺く 蒼 曉雀
 言此障掃せく とも客 迂喬
 花の若れ移りし 記布留此里 相鳥
 糸くげよ口く ぬき縁又訓 機刀
 秋を弦んく 亭、歌の抽 共樂
 おまゐる月々く 冬か 持り 阿人
 温泉と觸ふ事く ぬき 巨羊
 け佛念行、在事と 祿の庭 羽昭
 詠能の 劫、き又 迹、く 相鳥
 嘗て 結句 瓜突、く 蛸堂 蟻刀

八景を 知り、く、み 分り、く 持 挑濟
 及び乃、く、く、画、く、 嫁定 満士
 泥、く、深、事、を、糸、 絡り、 陶を 巨羊
 千、支、の、形、家、く、 待、よ、む 羽昭
 物、少、く、て、弱、く、又、み、は、た、く、 悔、き 亀文
 一、生、よ、出、ま、く、 細、工、小、死、せ、く、 記 周木
 生、花、よ、葉、く、く、 入、事、る、く、ハ、の、を 相鳥
 待、合、く、く、あ、る、事、を、 見、座、あ、る 阿人
 関、より、清、き、 関、を、み、あ、る 魚洞
 花、の、同、り、 二、度、位、形、智 満士
 原、ん、く、兼、よ、仏、を、 施、を 相鳥

十九日 河ハ多ク 一き源尺州 阿人
 千郭 ありつゝ川 多き 龍里 釜調
 重の段 けり 赤も きれて さいり さいり 桃満
 新より さいり 切つゝ 糸 繫 巨羊
 来へき 音 あり 火の あり 音 羽昭
 音の 強 味 淡く 候 子 居く 鯛 前邑
 城々 物 くる 葦 舟の 海 一と 茶風
 乳 音を 同ひ 一と され 横所 亀文
 むう 一と 多き 安 あり 叶 芝 茶風
 七 分ハ 屋 安 桃 多 あり 里 桐鳥
 和 泉の 大 津 多 進 あり 唱 牛 満士

南門 一と 矢 又 あり 多き あり 一と 押り 亀文
 吹 売の 産 人 一と 心 地 あり 又 あり 桃満
 日 一と 力 あり 一と 力 あり 一と 坂 相鳥
 一人 切 好 織 も 多き 好 あり 一人 巨羊
 一と 好 ハ 花 あり 好 け 一と 旅 衣 茶風
 織 一と 好 あり 一と 好 一と 好 あり 春耕 筆
 程 色 人 一と 好 色 あり 一と 幕 巨羊
 遠 留の 地 あり 一と 好 一と 好 あり 左橋
 一と 好 一と 好 一と 好 あり 霜 あり 春耕 筆
 好 好 あり 一と 好 あり 一と 好 あり 蒲 丈
 好 好 あり 一と 好 あり 一と 好 あり 巨羊

藤々若葉ハ風の何れもぬ椽の上
 亀文
 砂小片々んと梅花出は
 丘羊
 野音の火あくくハ橋と茶
 魚洞
 茶風
 茶風
 天も納交を口切り一雷
 春耕帯
 家得りと志くは云ひ立
 前邑
 二年一そりし十九あり居り
 亀文
 茶風
 茶風
 石燈のまきあはね茶風ハさうた
 茶風
 作海辭やうふ交神の相
 亀文
 又下中つくと二里下る山
 春耕帯

高の辛下て氏を清める
 南都
 馬原
 風花押出は古つ乃鐘
 致知
 家々々流り天り鍵鳴る
 一外
 川風小立中あ乃夕燈
 馬原
 源氏の夢よその道事加田
 致知
 添味小一重の葉ハ肌をく
 一外
 法集印地とふ志きぬ甘藷膏
 南都
 山鳥
 脛をあくハよ松々吹上
 柳之
 白糧を磨く反乃暖
 馬原
 向ちのゆきう連せ橋の反
 山鳥
 高浪乃末ハ泥所ハ茶
 柳之

花一争 洞の多君も和らふ
 葉山子よお織忌せしき原
 此区りののまゝいそゝろゝむ
 池目れ参まは相り 御さう
 めらむいさゝく鳥丸の并戸
 鼻 弥ふ 添へ あり 乃ら 肌
 靴 出し 兼ハ 南天又 折付せ
 さいよをめなう 扱ふ 階津 漱
 系合れ 藤 免り 茶の 男山
 紹 呷よ いたた 南ふ 忠の 傍
 他宗乃 参へ おく ぬ 川 留
 柳之
 一外
 致知
 馬原
 羽昭
 全
 全
 全
 全
 茶風
 釜調

血系の血は汚きを持けり
 散免状よむ例ようう相
 藤り船て藤入し白拍子
 彦安穿へもいまはお庭好
 三朝葉毎ハ曲多の葉毎
 又の意交を詠免負した
 鶴路れ悪く尺々る月の雪
 一年又一友の用志知新を
 叶を尋り系拍て出新
 侍の皆活き 君り代
 後れ立身を折但以床柱
 茶雷
 洞秀
 煮桐
 洞秀
 茶風
 男池
 釜調
 茶風
 洞秀
 馬門
 其博

まき海苔分るく浪田へ四又人

伊丹

藤花

目一ツ之介界のおか

雲廊

被を脱てむ忠志の中

馬門

又十里小夏一ツ又るく

其博

上細工ぬり情癖ぬち

雲廊

菊を視いたんこて視ひを派世界

藤花

庭のぬけさる比と又由月

馬門

野波れ梅と啼へと傍路

雲廊

直乃ちと換

其博

一とが落

藤花

乙姫のおか

雲廊

葉の味是へかちゆくけい

山鳥

大津れ流院ハ鬼と一刷毛

柳之

配取あを日敷と情むむ

瓶之

夢下一活差よ香と雨上

高野

蝶の香と流さるる一瀬の糸

哥水

大乃控

子周

鳥入一筆の姿ハ日と待に

瓶之

梅々ふ夏く約舟りる中

哥水

津の秋々

子周

一分軽

瓶之

下友かき

子周

註

汐時をまじり一壺のうへへ森
文衣小もがとくと田舎武士
内よ落るねを吹出ほるの声
嘘云ひうむりて得干る神北海
花小叩うき明る若乃戸
坊と皆お侍りうむ山さう
切炭のあふむぢり侍
初陣の終と息せり墨衣
才子小昇きく才子の山越す
姑と成人のきりけり
日枝お裁くくまふおを打
庫山

流あて巻をあらう一版振る
小豆撰時り一生又遠きれ
鹽錫ハ仏法を出し一
運ハ命とねとふえ日
大名の終を傳へて尻よ
茶を拵又月又花を又お出る
土圭二夜守 借掛へう那
大智のあし叩くまゝんと又七切
家を買をやく入る法のた
一代男 屋 やうこえ
下の園悪人形を傳おさん
茶風

哥水

子周

哥水

高野連

哥水

左橋

周永

金調

新色

呂雄

庫山

前色

左橋

金調

至席

呂雄

茶風

庫山

釜調

至席

前色

茶風

文川へ急と秋明のふし
 釜調
 佛といふぬやうふり管
 至席
 木のき花さくく人亮やい
 庫山
 幕温象う漸んで雲の月落
 茶風
 信都の夜さそ中あ汲む
 釜調
 双六ふあまう徳々あ文子
 至席
 神より新誓い石性のみ
 釜調
 八日月ま圓なるハ秘あう
 呂雄
 換使清さく文とき何なる
 釜調
 信都一屋の軒れやうく
 前邑
 冷て仕あう人も好い二軒屋
 至席

湯うくことくはあう
 釜調
 三井古ハアく石山さ伏あ
 茶風
 機ををはるがことく小版と切
 庫山
 法のなともあう
 釜調
 鬼子母神仏の中一乃姑洗
 至席
 備七新中え好確井坂
 周木
 塩切くいまさ熱くも塩抽あ
 釜調
 今の記系さう蓋母とと位
 釜調
 厚れなびもあう
 鳥取
 有楽
 碓の妙り
 伊丹
 馬純
 清水れ庭く
 舟き白付石
 釜山

牝のうれ魚と頼ふ院おろし 馬純
耕 以半の啼一虫 有楽
後れ院入る 観音の慈悲 馬純
お凜一 長座坊に扱まのそ 紫山
过れ院入 名を觸と送者 有楽
追利れ出そ少ねさ乃春新 馬純
ま板を治ふ叩く初ま 紫山
お板小抱きく 有楽
氣よ入る院坊に折るしる節 馬純
てあめの物れ流生如月 満土
人の名けく名お乃浄 々

大黒おさへ 竹まら 徳 々
後言も言ふ守えまおま下り 々
唐藩を踏ふ折一白下ま折 々
清くまら 子細まら 々
石おさへ ちるくくまら 々
牡丹花の口お儀一町まら 前邑
け世のふへおとけ 湯泉 湯泉
まら坂まら 前邑
まのまら 破きまら 周来
音一まら 何個まら 茶風
園討まら 扱まら 茶調

又踏みしり車り 乃ん
立身せほい死んとかおりよ
下もぬくまを程の氣多き
けりりけりてはては
妻りりい妻りりり友に
屏風あき座敷のうちに
海老のこりりりりりり
大名を抱へらぬとい田舎
裏をさす福を積む
代友を愛ふ太平一首
流るるるる 福なり川
茶風

詠しり嘆ひ成ゆとさる
去色の活生の旅おりの
福めはきよし 之月乃月
百年忌塚尋ねは狐
上りく小姓の花の
勿神なりとも養子 物奴
宿持る代 概至 親音
回しり日よきりりりりり
知りりりりりりりりり
用帳りりりりりりりり
如月乃事乃年玉いりりりり

茶風

茶風

叶へ〜〜 叶 野鶴をきり。 前邑
 耶将莫耶婦〜と〜〜久 呂雄
 坊君のた〜ぬあ〜保〜きん 茶風
 息吹〜あ〜く〜咲 罌粟とまの 周禾
 いのそ〜の〜て 花〜〜 咲き〜 庫山
 宝蓋 踏し〜 伽藍 新〜 亀文
 晴〜帆を降〜ぬ 汐路ふ〜けて 行 茶風
 氣 横〜〜 咲 山 伏〜乃 庭 曉雀
 中 地 打 交 あり〜その 風の 瓦 瓦 庫山
 才 分 甚〜〜 又〜〜 叶〜〜 漢外
 川の 手 持〜〜て 八 途 ぬ 大 判 金鷲

手 小 金 少〜筆 一枚 八 海 子 七 猪 赤羽
 せ〜〜と 勢 急〜〜と 宇 都 郡 の 山 金鷲
 来ると 陣 出〜〜 あを 云 八 夜 冬 降
 花の 能 大 坂 者 八 大 河 へ ぐ 溪 外
 為 之 き〜〜 日 八 陰 を 急 登 金鷲
 へ〜〜や 突 あり〜川 へ ぬ 網 赤羽
 河 へ あり 二 階 へ 蕎 麦 を 折 立 せ 冬 降
 叶 へ 八 子 丸 と 今 小 兒 念 願 薄 衣
 竹 籠 へ 送 寄 細 崎 乃 あり 暖 産
 妻 あり かく 籠 あり 信 鳥 嘯 收 雨
 女 ま きの 吹 の 田 子 下 取 寄 周 禾

あ〜〜名目録て〜
 才分晴る〜茶碗先見事
 菓あ子の切まよ智〜
 指合又ワさとおれ〜九折
 笑より〜かさのさ〜
 又後片覚名板〜名茶合
 妻比海〜大坂力海
 赤〜云よ〜半〜と云傳
 印口秋味 董の〜
 松山赤外竹〜
 互茶のす〜
 馬純
 柳風
 茶風
 收雨
 亀文
 曉雀
 牧雨
 周末
 岑偉
 金鷲

酒〜〜先〜吾あひ外科
 立辨不密ま〜
 猿新うま〜法華〜
 策の上合り〜
 出世の門〜
 山吹山を〜
 笠自雲の指〜
 男の純〜
 曇乃の遠出〜
 不二の〜
 洗新小凡呂の振〜
 柳風
 馬純
 桃風
 紫山
 湖月
 紫山
 桃風
 馬純
 紫山
 桃風
 馬純

まさか何ぞのしるしを^カと云ひ
 天地とよきまゝ兄の弟殿に
 東中とたまたま指と触
 江戸強れおけり新町の^南名
 能まゝハ縁控おま交柳^日
 恒々を^日箱日のれ
 左侍とつゝあまゝ儒者の娘
 荒麻ありハ飯焚て
 折ひ返一々^日あきた燭臺
 別深の山乃秋ハ^日結文
 詞う^日被をひ^日ち^日と^日斤

桃風
 馬純
 紫山
 和休
 可樂
 紫竹
 紫山
 可樂
 紫山
 和休
 奈竹

叶あゝ文を^日神小^日破^日き
 踏浪皆^日城^日と^日あり^日女^日老^日他^日新
 笑ひの^日胸^日る^日眉^日の^日志^日雷
 鴈の^日啼^日あ^日ま^日声^日ぬ^日ま^日楮^日梓
 ち^日川^日杜^日宇^日清^日一^日矢^日能^日る
 まえ^日眼^日の^日そ^日や^日ま^日家^日義
 人^日る^日を^日ま^日ね^日る^日そ^日れ^日為^日燈
 出^日の^日場^日隈^日を^日ま^日り^日出^日る^日孫
 男^日り^日強^日あ^日ま^日り^日御^日仕^日ま^日る
 晴^日り^日風^日あ^日ま^日り^日清^日あ^日ま^日り^日風
 奏^日て^日ま^日ま^日り^日ハ^日皮^日む^日いて^日登

紫山
 前邑
 柳漁
 布谷
 呂雄
 至摩
 柳漁
 左攝
 蘭古
 前邑
 梅州

空ろ箱ふ今千足麻を唱
出とまうと人乃碑の沼
一日の馴染又指を切て控
才子と皆醉休也秋のさう出来
冬丘切まハ雨乃 瀧 彦
後形りも圓喰ふ時も開なれや
海院を懐きハ歌と終まら
きも圓盤印を馳めく又況き
荷れ縁掃一笥鏡 摺合
亦あまうとこわく目と種瓢
船と雪うんとさふまうとさ

五馬

呂雄

茶雷

釜調

布谷

呂雄

魚洞

蒲丈

兔道

鴉谷

前邑

鳩の舞のハあれ風中の如飛
今若船ハ舟乃 平 舟
ま園よ減乃ハあくる下屋妻
梅の花信ハ絶きてままし
得くまうとく 袴 絆 柳子
舟叩き侍人ハ来は極まら
階うま出るとまハあまら
禅 傍りまて 庭よ 庭
川うがおまは燃しや袖香炊
下子とお人ハ靴音次第集
水ハの石まうとせ 燈 燭

呂雄

釜調

茶雷

三馬

前邑

至帝

呂雄

布谷

鴉谷

五馬

兔道

題中

切つてくはくはかききり
就きう通きは佛檀り
いけうの氣遠ひかききり
也送うと嫁入と抜む一里塚
片と合わうとあきもきり
必の果ぬりちききり
橋へたうとあきもきり

鼎玉之部

薙刀ふおひけきり
中川よもくほくあきり

かこちけけり
是拙をんかきり
考はよ又けり
月の影けり
婿き腰と花あきり
むて友ぬくて
尾二人けり
吾源くけり
内弁の雲又色あきり
子とほめきり
骨くはけり

兔道
至席
前邑
釜調
呂雄
茶雷
三馬
楮林
琴水
幸速
楮林
松浦
幸速
楮林
兩柳
幸速
以中
竹島
浜浦
井蛙亭

昔衣地底の終る世の峰 幸速
新れれしとろて物麻藤葡萄 西柳
破き衣故 埋る 朽極 茶雷
待るる花を影さる家の会 令節
朱く子をは 春を過力 北溪
情盡く無備病は明乃月 鳥水
一日よそ 必智乃 行遠い 茶風
笑つあそ去ころ 路のあそい 桐鳥
ま〜や鏡烟さりく 雲妻まら 鳥水
空もまらゆ 衣法 ちり 宇叶
後不い〜しを 染とや 下茶奇

聖買小一 飯も備さて 一乃交 寄節
文結よ 朽かさ 飯事 粥 自晴
寒後〜 多〜 化者〜 小野
口上と 連〜 形〜 飯者 具夕
寝〜 小袖 燕石
三寸、切火乃 糸い 帯 寄節
行〜 水の中 柿 自晴
呪り 里へ あり 半る 紐の 泉流
蚤〜 葵を 紙〜 燕石 寄節
不孝も 孝も 又〜 飯れ 茶風

書や子とん控もけつを掃除没 巨羊
 切つきくきんく子かく大名 釜淵
 面とて一人首後てんもあ 前邑
 少ゆふも口伝しきり兼合 周糸
 遠入とあ内孫めまりは先 近喬
 文廻し女と嫁乃古日月 宝壽
 や月や控をかきくも控は 舞巾
 大名の尻よ玉のはく一人旅 如突
 文へきるのり驚かみ 桃風
 控く世もきくも氣て空振ハ漏 近喬
 水波の隔もあきぬく神 芋月

花のく先もあひもを 種乙
 宗合小信何く花の夕暮色 如突
 家つく特癪を打を追音 舞巾
 坐符もるもへ居る下り物 祇定
 冬枯や尻うける掛造り 桃風
 大坂のあを敵もあむ乃令 ^{願合ぬの} 菊古
 川井ハあきど伽羅金の市々糸 周糸
 孔子をまあむ團く北秋 菊古
 後家てけ世とてしきり中 周糸
 吹れをきりく極む風巾 九夏
 水を焚ハ名あくとたれ 寸松

女より替り一版に拍子木
 命を申しけけ山を竹
 庭で袴を脱一 大曲
 けこと又えけ急を結着
 測と測との中よ浅次
 對するを必殺くも危をまじ
 水 魂 手控(ま) 菅原
 日小恵む八条目乃むの家
 摩りあがる鶏の後よゆきまに
 一天下を小入とさききこ
 織おるは布一 恵む備書

左橋
 桐鳥
 茶風
 釜調
 前邑
 至席
 庫山
 為所
 芦洲
 蟻卵
 一幸

相識より指不二のまき日
 換料出しく深く又る匠選
 頻加のワさお 如き村
 鼻て筆法片くく と類
 徒出は坊中 務て版冷
 さうと出る聖安の風は建仁と
 狐を守りし 衣着麻中
 下女あをよきさる楊子妃
 ある又る 顔の佐助の神
 羅紗小甚懸 養ふくも
 多むむ人 多 多 多 多

漲谷
 近喬
 加秀
 椀雪
 嵐竹
 暖雀
 紫山
 茶風
 釜調
 至席
 馬門

空をふらの先へ逐まりる風
望せば福なうくは韓客
使強てえのき借さぬ雪
皆活く又之し初日の去借入
大根の肩少と静さ新れ衣
六十帖と片くむ輪
煩絶の胸きとたは縁子
ふるれをまの川きハ福臭き
侵の耳も入し編笠
爪ふと勝る多ゆく血判
亦日より肉う花なりまつて

其博
馬純
庫山
茶風
子周
馬原
一外
桐鳥
如風
蟻卵
楚頭

胸の顔向ひあやしく居る顔
害と成亭さとも奉新) 専
ぬく友来く帯を仕出は
握りまき昔の池小極高り
竹友の身よ小病後やう
産路り物きは二日月入
探進しゆく兔の屯る生駒山
捨まるりこくおき分の喰れ家
又一つ摺腹の世話と又よろけ
一の感しゆく宿体信りり
身ありの様をばいときあへ

素相
桐鳥
楚頭
洞秀
蛸刀
茶風
前邑
釜酒
至席
其樂
巨羊

福屋の抄んどみー女客
周の例もさうな新
永代帳乃 思ひ正月
月々通る 通ると 神流
貝挿さるは口平 鬼灯
定よ入らよ奉つてあ 隠居
庭さちんぬむられ門人
裸力て凡喉打は居るよに
虚言強の願也ー花の中
續て仕廻とーのあお流
壇上と飾さハ鳩ハ友と喚ひ

羽昭
挑潜
馬門
茶風
洞秀
其博
高野蓮
山鳥
柳之
蒲丈
茶風

さゆの如のゆきさゆとちやいと市
空くぐエまなりくと果ささむ
白ひの樹をへをぬでんぐ
あさるさゆとさるさると知
侍一人 踊あさるさる
神乃 嬉信つて涅槃會
新お変人ぬらん 聲
後の花給仕人へ乃給仕人
あさるさる 帰ると侍とあさる
人さるさる 吉たと花の初冠
さるさるさる ぬよ小鳥れその流

瓢水
庫山
呂権
有楽
前邑
馬純
周禾
茶風
釜調
満士
全

使乃女連れく松川 茶風
 あちやう讀之教うもよひ付 桃風
 初と音一一人はうの是女 周末
 付ハ吹是次舟の友柳 柳溪
 魚り船之日詠く松を控 蒲丈
 夏の世と云りく福子留きく 三馬
 茄子れ若く小女防をうさ 至帝
 絵小巻くきて死る魚有権臣 来汲
 三界の智忽れ限りも訂を常 魚洞
 源氏強れ雲の通るれ遠い柳 金襴
 男れ位を子とよめ意 鴉谷

空々渺く知れぬ 柳脈 呂雄
 沖の浪破へ續くハ屋裂人 蒲丈
 佛れ若く音信の風 高野 石竹
 結るる朝よを夏の雲く飛 湖月
 尻り塩砂を公の帯 紫山
 由んごうハごうを目高おむへよ 岑降
 人よ強く唄く徳の礼を髪 溪外
 皆備一帳一竹の気きひ 兔道
 一生を一日控るるれ井裏 得魚
 祈るハ初水 順礼を長谷 周末
 慈勤那万葉をよめて出損ふ 庫山

丸腰て居る船の魂 茶風
 神宗男を極そり船首 至席
 裂んがてりり 五年日糸 一來
 八葉少く安るといふ 蒲丈
 中一窓を名ハ東大寺西大寺 金襴
 名ろと一板拵んく船倉セ 左橋
 裏枯の庭へ何と指二人拵拵 茶風
 手代仲るへ黄ふ十六板 桃風
 傍く拵 名一 管燈 工灯
 唐拵くよて玄目てくる 柳陰
 庭てろりのふ二汁七葉 和休

未定

法多ハ足と体少子飛客行 馬純
積中てりり
 板板をまろく毛又よはくをふ 鴉谷
 似傳ハ通さうし板の名こり 可樂
 ねくすはありろひ隣 奈竹
 去々ハ法合おれ茶葉 呂雄
 厨斗目織喜粟をのり者 至席
 乃く兼傳小せつ通谷を始 前巴
 月のやね陰奥の花火脚五百石 周糸
 善まろく踊る赤いかにゆく 茶風
 又ハ半裸セあろく今れ者 三馬
 やれくまや泥むあつた方の世を

吾輩よ老の用れをくめなる
 小斗れ下ふ事や清く人
 大工の智恵て今不修よ
 別とまて叶へ踏白き
 未ぬといふ事なきうさ
 藤舟てすき修新しぬ
 親意代のそ甲。此立
 神風のたうをい吹し天
 今とあうともた過ぎい
 秋の香戸控鳴して競べり
 鴨類中で鴨の立込乃秋の夕暮
 羽照
 阿人
 亀文
 春耕連
 柿廊
 庫山
 馬純
 三馬
 庫山
 赤羽
 五馬

一日の如く能く山法師
 去手かきくる顔さし出
 流のぬらわ川佛も備ふ
 夕への旅人花さく去
 布谷
 周糸
 前邑
 周糸

來章之部

まうくや埃りの溜る際
 大工の腰り中門乃鍵
 病のハ袴持は下京
 又るかとおふ叶あさる山
 方を拓く園の樹立
 枇杷
 稽風
 南仙
 柳紅
 今篇

伶人の祿の厚とも仰しとて
 乞彼の三年早くく多かり
 子毎子中絶ある一人
 山勢よく来て啼ぬるも
 川遠し黙るあをき止
 世界の奇くも〜大只橋
 村雨よ迎ひや〜柳屋入
 善く事告入乃聲使老ふ事
 口邊もが〜み〜と足邊に捨ひ文
 子の合と茶戴く目のお
 赤梅極の如秋り似〜源

至帝
 茶雷
 前邑
 赤羽
 至帝
 左橋
 馬託
 鳥窓
 桃風
 前邑
 同未

拂子玉之部

吸あも下手振借〜ぬ家
 一言残りや〜子り弘めり
 人々後り多り崎より〜い
 くら〜〜〜の〜〜白状
 未々後後多〜侍で君の
 飯名中の序、讀座〜雨子院

以野亭
 巨羊
 亀文
 釜調
 一來
 紫山

二玉 卷中之秀逸

色去か居る〜〜花よお〜
 魚洞

誹諧右紫 白羽集

全部三冊出集

同五文臺 同

全部一冊出集

同半墨 同 獨吟發句

全部一冊出集

同難波筏 同撰 二百歌仙
高判集

全部一冊出集

寬延三年

大坂北久太郎町心春橋筋東入

發弘處書林

丹波屋傳共衛板

町有軒

松尾堂印流

卧游亭景